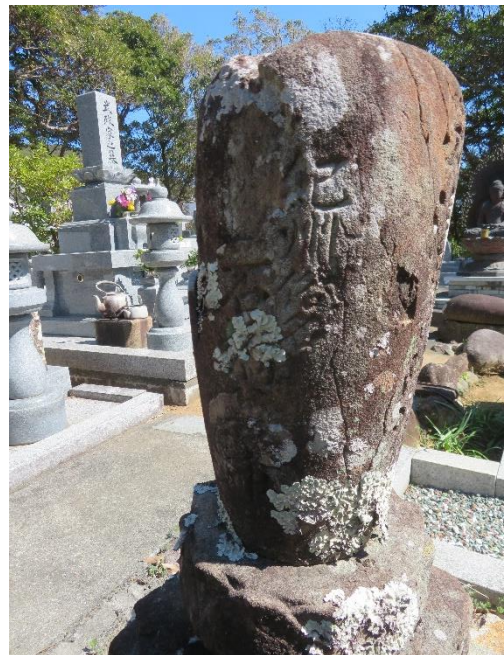


「紀州印南の旅漁海民の痕跡」

伊佐共同墓地(足摺岬小学校隣地)には、紀州印南浦出身の旅漁海民の墓碑が幾つか残存し、その生活の痕跡を留めている。17世紀後半、足摺半島西南部の浦々を据浦として漁業を行ったのが紀州印南浦出身のカツオ漁師たちである。その中で、伊佐浦(現在の足摺岬地区)を本拠とし、カツオ漁や節加工・魚屋等を多角的に経営していたのが石橋善市である。

もともと石橋善市のルーツである石橋屋は、代々紀州印南浦で捕鯨を営んでいた。印南浦での衰退が著しくなり、活路を求めて、善市の祖父の代から、父・善市と約100年にわたって土佐国幡多郡伊佐浦に進出し、旅漁を行っていた。



↑伊佐共同墓地の石橋善市墓碑

彼は、谷真潮の記した『西浦廻見日記』に登場する。ちょうど巡視に来た当時の浦奉行谷真潮と石橋善市との会話内容がそこに記されている。

「こゝにも紀州印南の者善市とて来り、魚屋をたておる、其のもの浜へ出てぬかづきおるがいへるハ、おのれが身ども三代百来(ママ)已来こゝに来り漁業する…」(伊佐浦に紀州印南浦出身の善市という者が、魚屋を営んでいる。善市が言うには「私どもは祖父の代から三代にわたりこの伊佐浦で漁業を行ってまいります」と。)

伊佐共同墓地には、その石橋善市の墓碑が建立されている。生前、金剛福寺に帰依し、その信仰にも力を入れていたとみられ、墓塔の形は、塔身が卵形である「無縫塔(むほうとう)」であり、これは主に僧侶や医師等の墓碑の種類に当たる。恐らく金剛福寺から僧籍を取得していたのであろう。

・『西浦廻見日記』

土佐藩浦奉行・谷真潮が安永七年(1778)5月6日から24日まで土佐国西部の浦分を巡察したときの日記である。土佐国東部浦分の『東浦廻見日記(磯曲の藻屑)』と合わせて、高知地方史研究会が『東西廻浦日記』(1961)として活字本になっている。

・谷真潮(1727-1797)

谷垣守の長子に生まれた。賀茂真淵に国学と和歌を学び、谷家を土佐藩教学の中心にまで高めた。宝暦十年(1760)、教授館設置とともに教授役となり、安永七年(1778)浦奉行、その後に郡奉行兼普請奉行、大目付等の要職を歴任した。(高知新聞企業『高知県百科事典』高知新聞社、1976年を引用掲載)

令和 6 年公民館サークル文化展

2月 15 日(木)～18 日(日) 4日間

令和 6 年土佐清水市中央公民館のサークル文化展が標記の日程で開催されます。この文化展は、中央公民館サークルに所属する 13 サークルが日頃の活動や研究の成果を発表する 1 年に 1 回の貴重な学習の場です。生涯学習の大切な活動だと思います。多数の市民の皆様のご来場をお願いいたします。

歴史の分野では、土佐清水市郷土史同好会(武藤清会長・会員 31 名)が、来年度市制発足 70 周年を迎えることを記念し、「市制発足 70 周年 一土佐清水市の歩み一」と題して企画展示を行う予定です。

開室時間帯は 9 時～17 時(最終日 18 日のみ 15 時終了)、場所は中央公民館(天神町 11 番 15 号)・3 階多目的室で開催されます。

「渭南」(いなん)か? 「以南」(いなん)か?

地域名の由来について

1500 年代末の『長宗我部地検帳』では、現在の土佐清水市域や現在の大月町の一部の範囲を「以南村」と呼んでいた。明治時代末までは、「以南」という表記が使用されていた。これが明治末頃から「渭南」の字を用いるようになった。

明治 34 年(1901)、現在の土佐清水市域の各校教員で組織されていた教職員の研究組織「以南教務研究会」(明治 33 年創立)が「渭南教育会」と改称されたという記録が残っている。

また、清松・上灘両村組合立の南陽高等小学校が、明治 34 年(1901)9 月 21 日に「渭南高等小学校」と改称し、「渭南」の文字を使用した。この改称の提唱者は、南陽高等小学校初代校長の中平信次郎であり、四万十川を中国の渭水(いすい)に譬えて、その流域から太公望をはじめ、多くの人材を輩出したこと。これにあやかって有為な人材を多く輩出していきたいという地元教育界の願いがあった。これが「渭南」の文字の濫觴である。

【参考文献】 亀井釣月・沖本樵児『補註幡南探古録』土佐清水市史刊行会、1966 年、4～5 頁。